

総務部長憤死す

小高根 二郎



総務部長憤死す

小高根二郎

日本経済新聞社

総務部長憤死す

昭和五十三年五月二十二日 一刷
昭和五十三年七月二十日 四刷

著者 小高根 二郎

◎ Jiro Odakane 1978

発行者 黒川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五
電話 (03)310-0151 振替東京 三 五五

印刷・東光整版印刷／製本・大口製本

0093-9731-5825

小高根 二郎

東京生れ。東北大学(法文)卒。元一部上場化繊会社役員。戦前、日本浪漫派の一翼を担った「コギト」に参加して詩と小説を発表、戦後はリトル・マガジン「果樹園」を発行して伝記を執筆。主な作品 詩集『はぐれたる春の日の歌』(コギト発行所)同『郷愁』(白川書院) 評伝『詩人、その生涯と運命―書簡と作品から見た伊東静雄』(新潮社) 伝記『蓮田善明とその死』(筑摩書房) 同『棟方志功―その画魂の形成』(新潮社) 等。

總務部長憤死す

光和レーヨン社長吉浪平助のスキヤンダルを暴露したのは、後で分ったことだが、甥の梶原拓介だった。それは十数枚の罫紙に、達者なペン字でしるされ、表紙には資料第一号と銘打たれていた。つごうによつては、引続き第二号、第三号も発表するぞ……という、険しい氣組を示すためだろう。

冒頭、「光和レーヨン株式会社社長、老醜の吉浪平助よ、退陣せよ」と標題を掲げ、次のように前置きしてある。

「昭和二十一年三月、創業のオーナー社長と専務がパージで退任。その後を襲つて、被合併会社・吉浪絹糸から常務で滑りこんでいた平助が、棚から牡丹餅式に手に入れた社長の座……。以来えんえん十余年にわたつてその座にアグラをかいてこれたのは、彼の狡猾な政略によるものだ。

そもそも平助は、後継者の育成など意図したことは、一度だつてなかった。社長就任直後にとつた三専務制時代。その中の一人に、且高商専攻科同期であつた日銀の古手局長を据え、他の二専務の言動を徹底的に牽制した。この腹心専務が行司役で、他の二人の一对一の喧嘩相撲を見物してればよかつたのである。ところが、その行司役が脳卒中で倒れ退任した。そこで新たに若手の二専務を選任して、四専務制をとつた。しかし、この新任の二専務は、それぞれ先任二専務と姻戚や縁者

の間柄で、一対一が二対二に変わっただけにすぎなかった。いうなれば、この喧嘩ミコシに乗って、太平楽をきめこんでいればよかったのである。やがて喧嘩疲れて四人はヨタヨタになり、いっこうにミコシが高揚しなくなった。そこを見計って、先任二専務は赤字だらけの系列会社の社長に追^おんだし、後に残った若手二人を副社長にした。それも、やがて例外なくおっ始まる一対一の喧嘩相撲、いや生涯を賭した血闘を、見物席からニタリニタリと楽しもうという魂胆なのだ。これが偽らぬ老醜・吉浪平助の実像だ」

この前置きに次いで、平助の生立ちが述べられている。

郷国は越前・三国町。時計屋の四男として明治二十八年に生れた。福井の商業学校在学中に、父が廊で腹上死。母の希望に従い、金儲けにゆかり深いK高商を受験したが、ものの美事に滑った。浪人一年、K高商に補欠合格。その電報をうけとった平助は、うれしさのあまり下駄ばきのまんま家へ跳んで入り、母に抱きつきなり踊り狂った。このエピソードは、すぐ親戚中に知れわたった。うれしさで母が告げて回ったからである。成績は拔群で、やがて特待生になった。卒業後、また母の意向で、東京のH高商専攻科に進んだ。専攻科二年を終えて商学士になって帰郷すると、さっそく福井の吉浪家から婿養子の話がかかった。相手は評判のスベタだったが、同家が経営する吉浪絹糸に触手が動いた。いや、当の平助以上に、母がもう夢中だった。彼は今度も彼女の希望に従った。養子に入ると、二カ年の試みの期間を無事に務めあげ、工場がある鯖江に、分家として邸を建ててもらい、吉浪絹糸の副支配人に就任。相場産業としての浮沈こそあったが、どうやら波浪を乗り切り、太平洋戦争中の昭和十八年に、光和レーヨンに合併され、危く常務で滑りこみセーフをしたのだった。以上、生立ちに関するかぎり、このように比較的穩便に拓介は述べている。

しかし、拓介の筆端が火を吹くのは、これからなのだ。

「平助が社長に就任した当座は、僥倖とはいいいえ、確かにそれなりの資格と値打ちがあつた。と、
いうわけは、光和レーヨンの主力工場——淀川のレーヨン工場、豊橋のスフ工場は、それぞれ航空
燃料と航空機材の軍需工場に転換してたので、おいそれと復元して生産をすることは不可能で、平
助が吉浪絹糸から持ってきた福井県の鯖江、石川県の大聖寺、七尾の絹糸工場だけが、どうやら織
維会社という看板に見合う生産ができたからである。『俺は持参金の三工場で、光和レーヨンの全
従業員を扶養してるんだ!』そう、平助が大見得を切つても、当時なら、誰からも文句をつけられ
なかつた。(もつとも、戦時中の八千名の従業員は、その一割にも満たぬ七百名に激減してはいた
けれど……)しかし、そう嘯^{うそ}けたのも、せいぜい四、五年がいいとこだった。昭和二十五年なかば
朝鮮戦争が勃発するや、豊橋工場で戦時中に木製の体当り自殺機用に生産していた合板が、韓国進
駐のアメリカ軍兵舎の建設資材として、いい値で飛ぶように売れた。その収益を資金として、待望
の淀川工場のレーヨン施設は、あれよ、あれよ……という間に復元した。さらに豊橋工場のスフの
復元と、タイヤの資材である強力人絹を新設する手はずも整つた。もし、平助が真に賢明であれ
ば、ここで生え拔きの二専務のどちらかに、バトン^{baton}を渡すところであつた。いや、渡さないまで
も、一人は副社長に昇格さして、化合織の専門的知識を活用すべきであつた。

「ところが平助は天恵的な時運を、自分の手腕であると錯覚した。この錯覚に酔つた彼は、曲りな
りにも豊橋工場でスフの生産が再開するや、息つく間もなく合織ナイロンに触手を伸ばした。業界
の覇者である大東化成が、アメリカのポント社からナイロンの特許権を買つて、独占的な巨利をあ
げつたからである。その特許料は、当時の同社の資本金十億に相当する巨額であつた。福山
社長以下の経営陣が、のるかそるか社運をかけた、大冒険だったのである。メクラ蛇におじず。
化合織にまったく無知な平助は、渡欧するなり、闇雲にナイロンの特許を探し回つた。たまたま、

日本同様に戦後の復興をあせっている西独に、頃合な出物をみつけた。エンゼル社のナイロンである。特許料も格安で、大東化成の十分の一の一億だった。当時の資本金は六億だったから、社運をかけるほどの危険もなかった。平助はK高商に補欠合格した時のように狂喜した。さっそく倍額増資を敢行すると、西独から技術者の応援を仰いで、急きよ淀川工場にナイロン施設を新設して生産にハツバをかけた。ところがである。西独の青写真そっくりそのまま模造した肝心の紡糸機は、いささか日本人の背丈には高すぎた。それを操作するには、特製の高足駄をはかねばならぬという笑止な難渋に当面したりした。それに不馴れも手伝った。デニール（糸の太さ）斑のお釈迦が山積した。糸は売るには売ったが、加工段階で染色斑が出て、返品がどツ……と続出した。そこに、待ってましたとばかり、ライバルの大東化成は値下げ攻勢をかけてきた。またたく間に、資本の四倍―五十億円ほどの滞貨ができた。折から金融引締めだった。極端に資金が詰った。配当は二分減配した上に、積立金をとり崩して、やっとこさ銀行の利子なみの八分配で、どうやらメンツだけは保った。

「しかし、兜町や北浜界限で、光和レーヨンの前途危し」と取沙汰する雀達はかなりいる。また気が早い経済雑誌は、同じ東亜銀行の系列で同業の『大洋レイヨンと合併近いか?』という大見出しで、すでに東亜銀行進藤会長と大洋レイヨン尾高社長の接触が始つてゐるニュースを流している。筆者はいう。安物買いの銭うしない……とは、まさにこのことだ。十分の一の対価で買った特許が、それ以上の効用を発揮するはずはない。その事実によつと氣付いた平助は、にわかに狼狽しだした。銀行その他からの融資の中には、個人保証をとられてる分もかなりある。万が一、不渡りがでた場合には、鯖江の家邸と山林が差押えられることは必定だ。そう、危惧した彼は、いちちやくその名義を、妻富子へ書替えたのである。その抜目のない狡猾さ……。

「この老醜の破廉恥漢・吉浪平助に、八千人の従業員の生活権を、のんびんだらりと今後も委ねていていいだろうか？ 筆者を含めた二万の株主が、省察もなく貴重な資産の行使を、今までどおり一任していいもんだらうか？ さてまた、かかる時代錯誤の経営を、この民主社会に存続させていいだろうか？ 筆者は否と宣言する。かの隆盛を誇るライバル大東化成にあっては、すでに福田、田中、林と社長は三代も替つてゐる事実を想起せよ。断乎、老醜社長・吉浪平助を退陣せしめよ。時によし、平助の任期は十一月末の株主総会終了時までである。それ以降の再任は拒否しよう。そのためには、株主総会前の決算役員会こそ決起の場である。副社長以下十七名の役員の結束と決断をうながし、あわせて関係諸機関の配慮と監督をねがうゆえんである」

こう、長々と書かれた告発文は結ばれ、最後に文書の送付先として、

光和レーヨン役員有志

通産省繊維雑貨局長

大阪通産局長

東亜銀行会長、頭取

と、しるしてあった。

この怪文書を、光和レーヨンの総務部長・高島次男が入手したのは、東亜銀行の庶務担当の江坂常務からであった。

「お渡ししたいものがあるので、暇な折にお願いしたい」

という電話で、大阪・淀屋橋角の東亜銀行本店をすぐ訪れた。「暇な折に……」という言葉に油断して、「ずいぶん暢気だな」と、後でやられぬ用心からである。用件は見当がつかなかった。四階の

役員応接室で待たされた。黄土色に統一された壁面とカーペット。壁に梅原竜三郎の富士の額。飾棚には富本憲吉の扁壺。庶民銀行という看板にしては、いささかもったいぶった雰囲気で、腰が深々と沈む椅子が、薄気味わるかった。

「やア、失敬。ちよつと会議があつてね……」

江坂常務が現れた。手にしていた白い冊子を、ぽい！と無雑作にテーブルに投げだしてから、高島に対座した。

「これが昨日、うちの進藤会長と北川頭取のところに舞いこんでね。弊行としては二部も不用だから、会長宛の分を君に呈上しよう」

「は？」

高島は冊子を手にとると、表紙をめくった。「吉浪平助よ、退陣せよ」である。未見の文書だった。それを知ると、江坂は、

「吉浪さんのことばかり触れてあつてね。だから秘書室長に渡すのが筋……とは思ったがね、あまりダイレクトだと嫌味だし、それに君だつて総会对策があるだろう」

といった。高島は「毎度、どうも……」と軽く会釈をした。江坂はW大。高島はK大。同じ東京の私大出身同士というわけでもないが、妙に馬が合った。江坂は先輩顔をして、総会屋の大物を紹介してよこしたり、なにかと情報を流してくれていた。

「後で読んでみたら分るが、かなり身近かな吉浪さんの側近が書いたもんらしいな。プライベートなことに、あまりにも詳しい。あるいは『他の部署に属さざる事項』として、やっぱり高島君の所管かもしれないぞ」

というと、江坂は茶を運んできた女子行員が茶碗をとり落しそうになったほど、大声で笑った。

「ちぇッ！　またまた『他の部署に属さざる事項』か」

そう、つぶやきながら、高島は丸めた「資料第一号」を、しっかり右手に握りしめて、御堂筋の黄土色に輝くイチョウ並木の下をもどった。どこの会社の職務分掌規定にも、総務部や庶務部の所管事項の一番末尾に掲げてある、この条項……。どこの部課の仕事からも食み出たあまいな仕事。いや、誰からも鼻つまみになり、絶対に手を出そうとも、貸そうともいつてくれぬ嫌な仕事。いや、いや、苦労ばかり多くって、功績につながる可能性が、全くといっていいほどない徒労の仕事。それが「他の部署に属さざる事項」という名の、総務部の仕事なのだ。いふなれば、会社という営利機構が排泄する糞尿みたいなものだ。

この処理には、総務部長自ら当る場合が多い。総務の表向きの仕事―庶務、文書、株式、法律実務といった通りいっぺんの仕事なら、担当の課長の裁量で充分だ。しかし、糞尿処理に似た「他の部署に属さざる事項」だけは、海千山千の部長自らの判断で、ときにフタをし、ときにはこっそり垂れ流し、あるいは溜めておいて大雨に乗じて放流するか、または遙々と遠洋まで運んで投棄する手が、必要だからだ。しかも、その判断は、即決を要する。いちいち上司の裁可を仰いでる暇もない。それでいて、なるほど適切な処置だったと、後で容認される妥当性が要請されるのだ。よっぽどの古狸にならねば務まらぬゆえンである。

そのいい例として、高島は江坂のゴルフの相手をしながら、東亜銀行の極秘中の秘ともいふべきスキャンダルを聞いたことがある。

それは江坂常務がまだ庶務部長代理だったときのこと。たまたま復員軍人だった部長はマラリヤが出て、休務療養中だった。そこに『新大和新聞』の専務だと称する大洞光治という男が現れた。緑な

し眼鏡に三白眼の小柄な男だった。「ご用は？」と尋ねると、「進藤頭取に会いたい」といった。

「実は、うちの太槻社長が、ロンドン特派員だった昔、日銀時代の進藤さんと顔馴染みなので、久しぶりに会いたいということ……」

「太槻保夫さん？」

「さよう。太陽新聞大阪本社の元編集局長の太槻」

江坂は、（ははん、この男か……）と、大洞を見直した。前年春に行われた戦後初の知事選挙に、役員待遇の編集局長の職を擲って、社民党から立候補した太槻保夫。彼の選挙事務長を買って出て、経済部を辞職した大洞光治の話を、まるで美談のように伝えた三面のコラムの記事を、記憶していたからだ。結果は、自憲党から立候補した近畿商工局長だった青間紋造に僅差で破れさったが、その後に『新大和新聞』をやっていると、初めて知った事実だった。この江坂の隙をみつけて、すかさず大洞は切りこんで来た。

「実は進藤頭取に関して、あまりおおっぴらにできない話がありましたね」

「それはどんな意味？」

「秘書の浦辺ミチとのスキャンダルですよ。今のうちなら、まだ煙が立っていない」

「まさか！」

言下に江坂は否定した。行内では「ランカシヤ卿」とアダ名されている貴族趣味の頭取である。まるで俗な大衆小説のヒーローのような愚行をするはずがない。そう信じて疑わぬ江坂は反撃にでた。「そのことで、貴社の太槻社長が弊行の進藤に会いたい……というんですな？」

「いや、太槻の耳にはまだ入っていない。不肖大洞のところに留つてゐる段階ですよ」と、大洞は涼しい顔をした。が、彼は三白眼の瞳孔の底に、怪しい黒い焰をもやすと、チョッキの

ポケットから江坂の名刺をとり出して、役職を改めた。

「江坂部長代理さん。一度、部長に相談されてはいかがなものでしょうか？ それとも秘書室長に聞いてみられるのもいい。いや、直接に浦辺本人にただされるのが一番でしょうな。なにせ問題が問題なので……」

大洞は思わせぶりに話を結ぶと、意外にあっさりと席を立った。（どうせ金の話だ）そう、予想していた江坂は、いきなり肩すかしを食った形で、後で次第に不安になってきた。大臣やボス政治家の大写真の顔写真を、ベタベタと一面に刷りこんだ暴露専門の『新大和新聞』。発行兼編集者の前歴はともあれ、ブラック・ジャーナリズムであることは間違いない。もし超特号活字で、「東亜銀行頭取と女秘書との特殊な関係」などとスキャンダルが公開されたら最後、その真偽とは全くなかわりなく、金融機関の命脈である信用を失墜させたような記事の掲載を未然に防ぐこともできず、放任していたというかどで、首にならないまでも、無能、あるいは不適性の烙印を押されて、管理職の椅子からぶっ飛ばされること必定だ。

江坂は大洞にながしかの金を掴ませ、係わりを付けておくべきだったと反省した。大洞の言葉どおり、療養中の部長に、よっぽど相談にいかうかと迷った。しかし、代理役もつとまらぬ無能さを、自ら告白するようで中止した。結局、秘書室長に相談にいった。根深のように生っ白い顔をした室長は、黙々と江坂の話を聞き終ってから、

「あの教養の深い頭取に、そんな馬鹿げたことが想像されるか？」
と反問した。

「私が秘書室長をしているのは、頭取を信頼もうしあげているからで、もし信頼できなくなっていたら、もうとつくに人事部に転部を願い出ているよ」

いかにもT大出身の秀才らしい確信だった。

江坂は、もう浦辺ミチに直接当ってみるより、手がないと思った。まさに大洞の計算どおりだ。

「この上は浦辺の身辺を人事部で調べてもらったら、どうでしょうか？」

江坂は、「馬鹿！」という一喝を覚悟したが、根深は白い額にほのかに青筋を浮かすと、

「それは総務部の『他の部署に属さざる事項』だ。調べるなら君の職務権限でやり給え」

と、吐き捨てるようにいった。（もしもなんでもなかったら、ことがことだけに、その時はそれ相応の覚悟をしておけ）という裏があるようにもとれた。

浦辺ミチに直接当るチャンスは、想ったより容易に開かれた。頭取が出張で留守、と分っているある日、頭取専用の直通電話を行外からかけ、電話口に出た浦辺に、頭取の一身上の重大なことがあるので……と、終業後に中之島公会堂の地下食堂に呼び出したのである。古ぼけた煉瓦建築の地下食堂のがらんとした、うそ寒く薄暗い空間は、灯台下暗しの、絶妙な密会の場所であった。広すぎる空間は、ペンキ塗りのベニヤ板で、いくつかの小間に仕切られていた。テーブル・クロスには、昔ついた汚斑が、褪せて残っていた。（別れ話でもするには恰好な場所だな）江坂は唐突に思うと、苦笑いで頬を歪めた。そのとき浦辺が、靴音を忍ばせながら入ってきた。

彼女は江坂の眼の前まで歩み寄ってから、軽く会釈して、椅子にかけた。互にこんなに間近で対坐するのは初めてだった。彼女はしっかりした眼で江坂を確かめてから、そっと眼を伏せた。頭取秘書にふさわしい落着いた挙措だった。長い睫毛だった。肌が白すぎて、ソバカスが眼の周囲に目立っていた。鼻は、先端がかすかに上を向いたギリシャ型だった。（これは頭取の趣味にぴったりだ）端麗というより典雅な少女だった。中部防衛司令部の元参謀少佐の娘であることを、江坂は人事部の調査資料で知っていた。それに、母親を敗戦後間もなく亡くしていた。まだ中学生の弟が一人あった。父親

も、今は何か職を得ているだろうが、彼女の小さな肩にかかっている生活の重荷は、かなりなものに相違ない。惨酷な気がして、頭取といまわしい関係があるのか？ などと切り出せそうになかった。草臥^ひれた兵隊服にエプロンをつけたボーイが、注文したコーヒーを運んできた。唇を濡^{ひそ}しただけで、紛^{まぎ}い物だと分った。大豆臭と、いかがわしい味がした。江坂は勇を鼓して口を切った。

「浦辺さん。頭取はあんな貴族的な人だから、毎日のお世話が大変だろうね？」

鎌をかけたつもりだった。彼女は顔をあげると、はっきりした眼で江坂を捕えてから、

「いいえ。別に……」

と答えて、再び眼を伏せた。

「おいしくないけど、どう？」

彼は豆ヒーを彼女にすすめてから、

「はっきりいうと、頭取とあなたのことで、妙な噂を触れ回っている聞屋^{きんや}がいてね」

と、斬りこんだ。

「妙なことを申しますと？」

澄み切った眼で、彼女は彼を見返した。まぶしいぐらい明るい眼だった。

「その男はスキヤンダルだというんですよ。スキヤンダルといえば、肉体関係という意味だろうがね」

「まあ！」

彼女は瞬間あきれ返ってみせてから、

「とんでもないことですワ。頭取様がお気の毒ですワ」

と、軽く下唇を噛んだ。

「いや、頭取さんよりも、むしろあなたがお気の毒だ。もし虚構であればね」

「江坂部長代理様は虚構でないとお思いですノ？」

「いや、虚構だと思えばこそ、わざわざあなたに足労ねがって、直接に確かめているわけよ」

「……」

「なにか思い当ることがないかなア？ あ、あのことが誤解されたのだろう……といったような」

「……」

「頭取さんは評判の美術愛好家。どこかの展覧会で、偶然あなたとばったり……と出会ったといったような」

「そんなこと全くございません」

彼女はきっぱり否定した。眼の縁にぼつと紅がさしたと思ったが、表情には微塵も動揺がうかがえなかった。

「困ったな。こんな誘導尋問みたいな下卑たことをするなんて……。誤解しないでくださいよ。もしも、あることないこと、デカデカと赤新聞に書きたてられたら、という危惧からだからね」

「……」

「新大和新聞の大洞の奴！ やっぱりでたらめをいったんだな。直接あなたに聞いてみる……だなんて」

「……」

瞬間、彼女はチカチカと睫毛をしばいた。いや、しばいたように見えたが、白臘の顔の表情は塑像のように変らなかった。

一週間ばかりして江坂の家に分厚い封書が舞いこんだ。差出人は浦道夫とあった。浦辺ミチだ……